

国土交通省首都圏外郭放水路

大須栄一さんの幸せスポット

# 放水路によって浸水被害が 減ったことが私たちの誇りです

通称「地下神殿」と呼ばれる首都圏外郭放水路。日々その管理をして、私たちの暮らしを浸水から守っている、国土交通省の大須栄一さんが案内してくれた。



## 大須栄一さん

国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所 首都圏外郭放水路管理支所長。平成25年から現職。茨城県古河市在住の46歳。

江戸川沿いにある広々とした多目的グラウンド。その隅に入り口があり、100段以上の階段が地下へと招く。下りていくにつれ、地上の物音がしなくなり、夏なのに空気がひんやりしてくる。

下り切った先には、薄明かりの中、静かにそそり立つ、巨大なコンクリートの柱の列が浮かび上がる。

その様子はまさに神秘的。通称「地下神殿」と呼ばれる所以だ。年間3万人以上の来場者があるというのもうなずける。だが、観光目的の施設ではない。中川・綾瀬川流域を守る治水施設である。

案内してくれた国土交通省の大須栄一支所長は、次のように説明する。

「この地域は、川に囲まれ、土地が低く、水がたまりやすい。昔から大雨になると浸水の被害が絶えなかったんです」

この被害を減らすため、昭和50年代に計画されたのが首都圏外郭放水路だ。放

水路は川と川をつなぐ水の路。大雨で中川などがあふれそうときは、放水路の水門を開いて江戸川に流し洪水を防ぐ。通常は地上で作られるが、この計画が立ちあがった頃、すでに春日部の街並みが出来上がっていた。そのため、放水路により地域を分断すると、地域に悪影響を及ぼすことが懸念されたことから、国道16号の地下に川のトンネルを作ることになった。

地下放水路は日本初の試みで規模も大きいため、当時の土木技術の粋を集めての工事となった。直径10mのシールドマシンを導入したことで、規模のわりに工期が短縮されている。この工事には、平成9年に開通した東京湾アクアラインの掘削技術が活用された。

工事が始まったのは平成5年。地下に施設を作るため、外からは何をしているのかわかりにくい。住民に不安を与えないため、要所要所で見学会や説明会を開いた。

古い地層から化石が出てきたときは、住民を招いて、化石掘りのイベントも開催。住民とのコミュニケーションを大切にしながら事業が進められた。

### 365日24時間体制で水を監視し、地域を守る

完成は平成18年。以来365日24時間体制で、国土交通省の職員等が交代で水の監視に当たっている。いつでも稼働できるように、通常は点検やメンテナンスを行い、出水した際には、総出でポンプ運転などに当たる。

この施設が誕生してから、流域の浸水被害は大幅に減った。大須支所長は、「春日部をはじめ流域の浸水被害が減ったことは、この仕事の大きなやりがい。自分の誇りにつながっていますね」と胸を張った。



+1のあるまち kasukabe

## kasukabe PROJECT:04 国土交通省 首都圏外郭放水路

首都圏外郭放水路は、あふれそうになった中小河川の水を地下に取り込んで、地下50mを貫く総延長6.3kmのトンネルを通して江戸川に流す、世界最大級の地下放水路。トンネルは国道16号の下に作られている。地下神殿と呼ばれているのは江戸川近くにある調圧水槽。各河川から集まった水の流れをいったん弱めてから江戸川に流す働きをする。見学は要予約。詳しくは、首都圏外郭放水路HPへ。

取材協力・写真提供＝国土交通省 江戸川河川事務所

AR動画。詳しくは裏表紙をご覧ください。